

伊勢神宮（詳細版）

伊勢神宮は日本の最も重要な神社です。日本固有の信仰である神道は自然界、すべての生命と人間の中にいる神への崇敬を基礎に置いています。公的には「神宮」として知られる伊勢神宮は、125の神社から成り、その中心には内宮と外宮があります。これらは太陽の神である天照大御神と、衣食住の神である豊受大御神にそれぞれささげられています。

伝説によれば、伊勢神宮は約 2000 年前に、垂仁天皇の娘である倭姫命によって創建されたということです。それより以前は、天照大神は昔の奈良の都で祀られていました。奈良に疫病が蔓延した時に、神々を鎮めるために天照大神の神鏡（日本の三種の神器の 1 つ）をしかるべき場所に移すべきだということが決定されました。皇女である倭姫命が太陽の女神を祀るための場所を見つけるために派遣されました。彼女は 20 年以上かけて探し回り、伊勢に到着しました。五十鈴川のほとりで神の啓示を受け、これこそが完ぺきな場所であると決断しました。それから、内宮が建立されました。

20 年毎に、内宮と外宮、14 の関連する神社（別宮）が建て替えられます。このプロセスは式年遷宮と呼ばれ、伊勢神宮で最も重要な儀式です。式年遷宮は古くからの伝統で、天武天皇が内宮の再建を定めた 690 年まで遡ります。それぞれの新しい神社は、それまでの建物の隣に建てられます。伊勢神宮の神社の建物は、あるべき場所の右や左にあるように見えるのはそのためです。建築が完了した後に、神々を古い神社から新しい神社に移す儀式が執り行われます。その時になって初めて、古い神社は丁寧に解体されます。このプロセスは、伊勢神宮の木造の建造物が永久に存続し、かつ常に新鮮であることを確かなものとするを目的としています。また、神社建築に関する古くからの多くの技術が次の世代へと確実に伝承され、継続する助けとなっています。

第 62 回式年遷宮が、2013 年に行われました。伊勢神宮への参道にある宇治橋も作り直されました。橋の通路部分と欄干はヒノキで作られており、橋脚は耐水性のケヤキで作られています。全ての神社の建物は、新しいヒノキを使っています。しかしながら、伊勢神宮の古い神社の多くの部分が再使用されています。宇治橋の前にある巨大な鳥居は、再利用されたヒノキで建てられています。伊勢神宮

の解体された神社に使用されていた木材の中には、日本全国に送られて他の神社建立に使われるものもあります。

約 90 年前、200 年計画が伊勢神宮司庁によって施行されました。この計画の目的は、神社再建に必要な木材は全て伊勢神宮が所有する森林から伐採し、供給することです。こうした努力によって、2013 年に行われた最新の式年遷宮では 4 分の 1 の木材が、伊勢の森から伐採されたもので賄われました。残りは、長野県と岐阜県にまたがる木曽地域から調達されました。なお、伊勢神宮の森を守るため、第二次世界大戦後の 1946 年に伊勢志摩国立公園が設立されました。

伊勢神宮創建後の早い段階から、人々は自然の恵みに対して儀式を通して感謝を捧げていました。その最も重要な儀式の 1 つが、神嘗祭（かんなめさい）です。米が日本の主食です。そして、伝説によれば、最初の米は天照大神の孫から与えられたものと言います。毎年、伊勢神宮の神官たちは、伊勢神宮で栽培し最初に収穫された米を天照大神に捧げます。この米が栽培されているのは、伊勢神宮の森の中を流れる五十鈴川の水で灌漑した特別な田です。これは重要な伝統であることから、日本全国の米作り農家の人たちも伊勢神宮に米を奉納します。